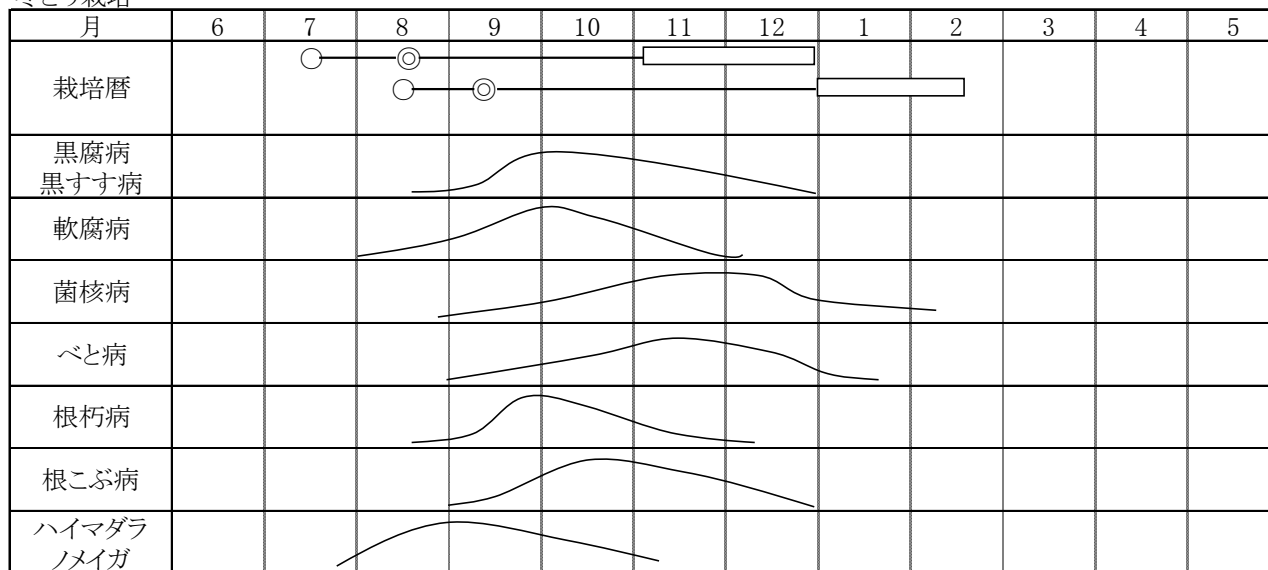


(14) キャベツ

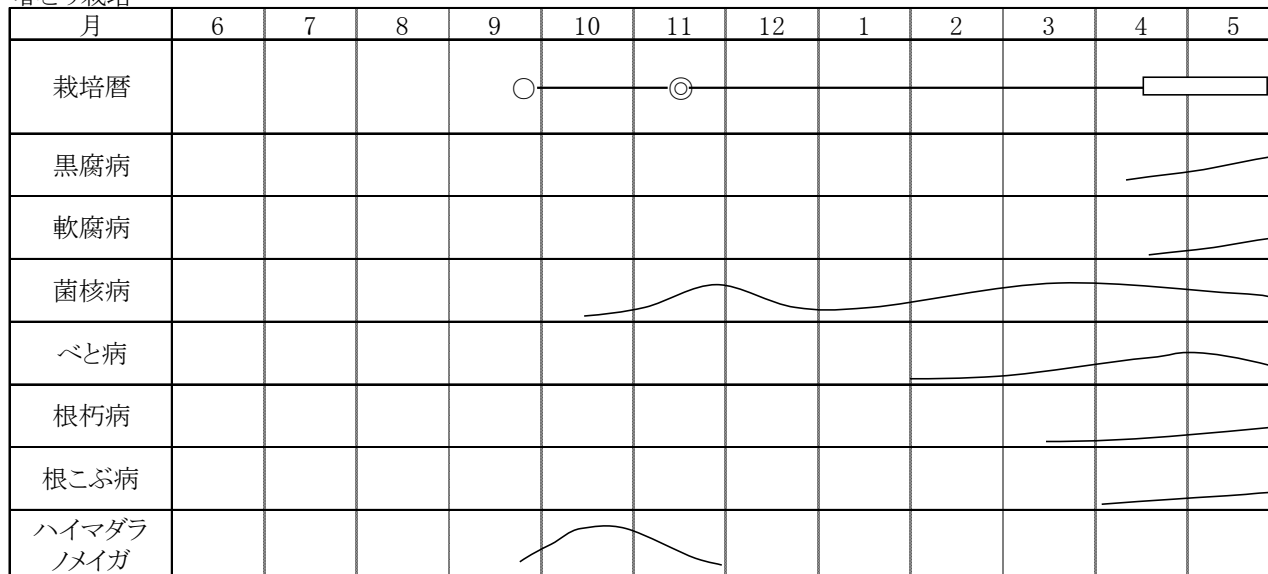
1 主要な作型及び病害虫の発病・加害時期

冬どり栽培



○は種 ◎定植 収穫

春どり栽培



○は種 ◎定植 収穫

2 主要病害虫別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病害虫の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。
なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
黒腐病 (細菌)	①品種により発病程度に差があるので、耐病性の強い品種を栽培する。 ②温湯浸漬あるいは乾熱処理により種子消毒を行う（野菜種子の消毒の項参照）。 ③連作を避ける。 ④排水を良好にする。 ⑤害虫を防除する。  発病株

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
黒腐病 (細菌) つづき	【参考事項】 傷口などから病原菌が侵入する。強風雨の後や害虫の食痕の多いときに発生が多い。 土中における病原菌の生存期間は2年間である。 台風等の強風雨の後は速やかに薬剤を散布する。
軟腐病 (細菌)	①イネ科、マメ科作物と4～5年輪作する。 ②早播きをしない。 ③排水を良好にする。 ④害虫を防除する。 ⑤発病株を早期に除去する。 ⑥定植前にできるだけ除草し、裸地にして乾燥させ菌密度を低減する。 ⑦高畝とする。 【参考事項】 病原細菌は土壌中に残る。晩秋、多雨の年に多発する。早播きすると発生が多い。虫害の食痕からも侵入する。 降雨直後の作業は、発病を助長する。薬剤防除を行う場合は、株の地際部に重点的に散布する。
黒斑細菌病 (細菌)	①アブラナ科以外の野菜と輪作する。 ②害虫を防除する。 ③排水を良好にする。 ④窒素肥料の過用、不足を避ける。 【参考事項】 傷口などから病原菌が侵入する。強風雨の後や害虫の食痕の多いときに発生が多い。
黒斑病、黒すす病 (<i>Alternaria</i>)	①消毒した種子を使用する（野菜種子の消毒の項参照）。 ②排水を良好にする。 ③窒素肥料の過用、肥切れを避ける。 【参考事項】 残渣上で発病し、分生子を多量に作るため、収穫後は残渣を速やかにすき込み、なるべく土壌表面に残さないようにする。 気温18～25℃の時期に発生しやすい。
菌核病 (<i>Sclerotinia</i>)	①連作を避ける。 ②水田裏作は発病が少ない。 ③菌核を生じる前に発病株を処分し、菌核を土中に残さないようにする。 【参考事項】 レタス、キュウリ、ナス、インゲンマメなど各種作物を侵す。 前作、前々作で本病の多発した地帯では、その後2～3年多発する傾向があるので注意する。 薬剤防除を行う場合は、株の地際部に重点的に散布する。   発病株 初期症状
べと病 (<i>Peronospora</i>)	①温湯浸漬により消毒した種子を使用する（野菜種子の消毒の項参照）。 ②排水を良好にする。 ③窒素肥料の過用と密植を避ける。 【参考事項】 苗床で秋の発生が多い。 本病菌は多くのアブラナ科作物を侵す。
萎黄病 (<i>Fusarium</i>)	① 抵抗性品種を利用する。 【参考事項】 キャベツ、カリフラワー、カブを侵す。
根朽病 (<i>Phoma</i>)	①温湯浸漬により消毒した種子を使用する（野菜種子の消毒の項参照）。 ②被害株はほ場より抜き取り、適切に処分する。 ③苗床で強風にさらされないよう管理する。 ④健全株を選んで定植する。 ⑤発病地では少なくとも3年間はアブラナ科以外の作物を栽培する。 【参考事項】 種子伝染、土壌伝染し、雨によっても伝染する。 種子の温湯浸漬を行う場合は、発芽障害に注意する。

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
根こぶ病 (<i>Plasmodio- phora</i>)	①アブラナ科作物の連作を避ける。輪作する場合には、3年以上アブラナ科以外の作物を栽培する。 ②石灰や転炉スラグ等で土壌酸度をpH6.5以上に矯正する。 ③排水を良好にする。 ④土壌の通気を良好にする。 ⑤常発地では夏播き栽培を避ける。 ⑥農機具はよく洗うか消毒する。 ⑦発生した畑は各種野菜の苗床として用いない。また、発病ほ場又はその付近の水田土壌を各種野菜の苗床用土に用いない。 ⑧発病株は早めに抜き取って、ほ場外に搬出し適切に処分する。 ⑨前作におとり作物(抵抗性ダイコン等)を栽培し病原菌密度を下げる。 【参考事項】 pH6.0以下の酸性土壌で発生が多い。 発病部位が土壌に残ると病原菌が広がる。 低湿地で発病が多く、かんがい水によって病原菌が広く分散する。 気温18～25℃の時期に発生しやすい。
アブラムシ類	①苗床では防虫ネットなどにより被覆する。 ②銀白色マルチやシルバートープを設置する。 【参考事項】 モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシが寄生し、モモアカアブラムシは主に10～6月、ダイコンアブラムシは主に4～7月、ニセダイコンアブラムシは主に9～3月に発生する。 薬剤防除を行う場合は、発生初期に葉裏にも十分かかるように散布する。
ハイマダラノメイガ(ダイコンシンクイムシ)	①苗床では防虫ネットなどにより被覆する。 【参考事項】 秋冬作では定植時期が早いほど被害が大きくなる。夏季に高温乾燥の年に発生量が多い。
アオムシ(モンシロチョウ)、ウワバ類(タマナギンウワバ)、オオタバコガ、コナガ、シロイチモジヨトウ、ハスモンヨトウ、ヨトウムシ(ヨトウガ)	①苗床では防虫ネットなどにより被覆する。 ②収穫残さを残すと次世代を増やすことになるので、栽培終了後は速やかにすき込む。 【参考事項】 オオタバコガ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウは8～10月に発生が多い。 タマナギンウワバは5～9月に、イラクサギンウワバは9～11月に発生が多い。 モンシロチョウ幼虫(アオムシ)
タネバエ	①未熟堆肥は使用しない。 【参考事項】 春播き栽培での発生が多い。